**第38回大会　セッション「ヒュームとスミス（スコットランド啓蒙思想研究）」事後報告**

報　告：（合評会発題）篠原　久（関西学院大学　名誉教授）

討　論：生越利昭（兵庫県立大学　名誉教授）

　　　　渡辺邦博（奈良産業大学地域公共学総合研究所）

世話人：篠原　久

合評会：アーサー・ハーマン著（篠原　久 監訳・守田道夫訳）

　　　　　『近代を創ったスコットランド人――啓蒙思想のグローバルな展開――』

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（昭和堂、2012年）

セッション趣旨

デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスを中心とする「スコットランド啓蒙思想」の（継承・影響関係をも含む）「多面的研究」が本セッションの主要テーマであり、これまでの社会思想史学会では、「プーフェンドルフの政治思想」、「ヒュームの政治学」、「ジェイムズ・ステュアートとスコットランド」、「ヒュームの経済思想」、「アダム・スミスの法学講義」（AノートとBノート）等が報告主題にとりあげられた。

　今回は、ハーマン（Arthur Herman, 1956- ）が2001年にニューヨークから*How the Scots Invented the Modern World: The True Story of How the Western Europe’s Poorest Nation Created Our World & Everything in It* という表題で、そして同年にロンドンから*The Scottish Enlightenment: The Scots’ Invention of the Modern World*という表題に変更して出版した著作の邦訳書をとりあげ、「合評会」という形のなかで≪「スコットランド啓蒙」像をめぐる諸問題≫を検討することが課題となる。

発題者（篠原　久）による報告内容

本書は、2部構成、全14章からなり、その前後に「プロローグ」と「結語」が置かれている。冒頭の「プロローグ」では、17世紀末（1696年）に「不敬罪」で処刑されたエディンバラ大学神学生の話をきっかけに当時の「スコットランド長老派教会」の立場が問題視され、第1部ではそのような歴史的背景から18世紀に「啓蒙知識人」が出現し、彼らによって思想的・実践的分野での近代化がなされていく次第が、そして第2部ではスコットランド人の「ディアスポラ」（海外移住）による、アメリカ、インド、カナダ、オーストラリア、およびアフリカにおける、「スコットランド啓蒙（思想と実践）」の移植過程が詳細に述べられ、最後の「結語」で、ブリテンにおける「スコットランド・ナショナリズム」と、イングランドとの同化（連合）の成果としての「スコットランド啓蒙」との関係が問題点として提起されている。

1. 新しいエルサレム」では、16世紀半ばのジョン・ノックスによる「スコット

ランド宗教改革」と、同世紀末の「ダリエン計画」がとりあげられ、前者の副産物としての「教育の全国的制度」という「近代化の前提」と、後者の「遠征失敗」による経済的苦境とが対比され、「第2章 自分たちが作った罠」で、経済的苦境（貧困）からの脱出策としての1707年の「イングランドとの連合」が、のちの「スコットランド啓蒙」の土台として位置づけられる。

　この啓蒙思想を支えた「大学と法廷」という二つの制度のもと、「第3章 人間の真の研究対象I」で「スコットランド啓蒙の父」としての大学人フランシス・ハチスンの道徳哲学が、「第4章 人間の真の研究対象Ⅱ」で「スコットランド啓蒙のパトロン」としての判事ケイムズ卿の歴史法学がとりあげられ、それぞれ「進取的な大学教育」と「人類史の四段階説」という、当該啓蒙の特徴が示される。スコットランド内部の問題としては、氏族制度が支配的なハイランド（高地地方）と、イングランドとの同化路線を推し進めるロウランド（低地地方）との対立（「第5章 分断された国土」）が表面化し、前者の一部の氏族が「ジャコバイトの反乱」（1745年）に加担し徹底的な敗北を喫したのち（「第6章 最後の抵抗」）、スコットランドは本格的な「経済的離陸」に乗り出し、グラスゴーは煙草貿易で繁栄し、建築家アダム兄弟は「近代西欧における初めての国際的建築様式」をつくり出した（「第7章 利益を生む企業」）。以上の「離陸」と「二大制度」を背景として、「第8章 エリート・クラブ――アダム・スミスとその友人たち――」において、（教会内の「穏健派」をも含む）スミスを中心とした「啓蒙知識人」による新しい社会のコミュニケーション理論が模索される。

　「第2部 ディアスポラ」では、冒頭で植民地アメリカの独立とその後の発展に影響を与えたスコットランド人の役割が宗教面（福音派）、軍事面（アルスター・スコッツ）、教育面（ウィザスプーン、リード）、政治思想面（ヒューム）でとりあげられたのち（「第9章 かの偉大な構想――アメリカのスコットランド人――」）、続く「第10章 北からの光明――スコットランド人と自由主義と改革――」では、ドゥーガルド・ステュアートの弟子たち（ジェフリ、ブルーム、ホーナー、シドニ＝スミス）の『エディンバラ評論』によるブリテンの世論啓蒙活動と議会改革運動が詳述され、「前向きの」スコットランド自由主義の側面が強調される。これに対して「第11章 最後の吟遊詩人」では、古きスコットランドへのノスタルジアという側面から、（歴史小説）作家ウォールタ・スコットの再評価と、「新ジャコバイト主義」を内包する「ハイランド・リヴァイヴァル」としての高地地方文化の再発見とをめぐる諸問題がとりあげられ、「第12章 実用的な事柄――科学と産業におけるスコットランド人――」では、啓蒙の実践面としての（産業・医学・運輸交通分野における）科学技術の進展と、経済発展（工業化）の「後片付け」としての「都市の公衆衛生問題」に言及される。

　第2部の残された二つの章では、ブリテン帝国建設において果たした（インド、カナダ、オーストラリア、アフリカでの）スコットランド人の功罪と（「第13章 陽は沈むことなし――スコットランド人とブリテン帝国――」）、新興国家アメリカ合衆国の発展に貢献したスコットランド人の（大学教育、先住民権利運動、通信技術、企業家活動等の）多方面での役割が明らかにされたあと（「第14章 自力でたたきあげた人びと――合衆国のスコットランド人――」）、末尾の「結語」では、戦後世界のなかでコットランド人の果たした役割が、「女王陛下の秘密情報部委員」としてのジェイムズ・ボンドのそれになぞらえられるととともに、「プロローグ」でのエディンバラ大学生に呼応するグラスゴー大学生たちによる「スクーンの石」（古のスコットランド君主たちの即位の石）の奪還に絡めての、「ナショナリズム」を土台とするスコットランドの自治・独立問題が、「近代世界を創り上げたスコットランド啓蒙」の大いなる功績との関連で言及される。

討論者（１）生越利昭氏

　著者のハーマンは「はしがき」で、「スコットランド啓蒙思想を、南のイングランドにおける知的発展とはあまり関係なしに･･･描き出すことは可能である」と述べているが、著者自身もニュートン、ロック、シャーフツベリ、アディスンなどの思想家の影響に言及しているように、むしろ「イングランドとの密接な関係においてスコットランド啓蒙思想が形成された」と理解するほうが正しいのではないか？

　また著者は、世界の各所においてスコットランド人が近代を創ることに大きな貢献をすることができたと主張しているが、その際の「スコットランド的特質」とはどういうものなのか？

討論者（２）渡辺邦博氏

　第1章でとりあげられている17世紀末の「ダリエン計画」は、18世紀におけるスコットランドの諸活動、とりわけ「スコットランド啓蒙」との関係からいえば、「その成立の≪滑走路」か、それとも≪躓きの石≫」となったものか？　換言すれば、この計画は「後続するスコットランド啓蒙の展開に何がしかのインパクトを与えたのか？

　また著者は邦訳180ページで、「彼[ヒューム]は、プリンシズ・ストリートの一区画北、セント・アンドルー広場の北西の隅に敷地を購入した」と述べているが、ヒュームが購入した正確な場所は、（現在、グーグルの地図でも確認できるように）「セント・アンドルーズ広場の≪南西≫とするのが正しいように思われる。

　以上の、討論者からの質問とコメントに対して、発題者およびフローから諸意見の交換があった。「スコットランド啓蒙」と「イングランド啓蒙」との関係について、発題者は、イングランドの思想家たちからの影響は認めうるが、18世紀でのいわゆる「イングランド啓蒙」という「知的集団の存在」には懐疑的だと回答がなされた。これに対してフロアーからは、日本では「イングランド啓蒙」自体の研究がみられないので、アディスン等の文書と中心に調べてみれば、新たな視点が出てくるかもしれない、との指摘がなされた。

　「ダリエン計画」については、発題者自身が当日のレジュメで、当該計画の失敗後、経済問題＝貧困問題（「限界に達した伝統的経済のスコットランド」）解決策としての「連合（ユニオン）」（＝スコットランド啓蒙の遥かな出発点）に触れられており、「失敗」から学ぶことにより、それが長期的視点では間接的に「滑走路」となったという点で、発題者との意見とは相違がないといえる。エディンバラのニュータウンにおけるヒュームの新居の場所については、討論者がグーグルからダウンロードした写真を回覧したので、ハーマンの誤記であることが確認された。

なお、当日の出席者は９名であった。　　　　　　　　　　　　　　　（文責　篠原　久）